令和　3　年度

第　1　回
総合教育会議会議録

行橋市教育委員会

令和　3 年 11 月　30 日（火）

総合教育会議会議録

1　招集日時
　　令和　　3 年 11 月 30 日(火)　　13 時 30 分 ～

2　招集場所
　　市役所　501・502会議室（5階）

3　出席者

市　　長	田中　純
教 育 長	長尾　明美
教育長職務代理者	金澤　精子
教育委員	水谷　知子
教育委員	村上　信哉
教育委員	桃坂　克己

4　欠席者　　無

5　出席職員等　　辛嶋教育部長
　　吉本教育総務課長
　　吉田指導室長
　　森本指導室次長
　　川中学校管理課長
　　木村防災食育センター長
　　増田生涯学習課長
　　丸山文化課長
　　門司スポーツ振興課長
　　井上教育政策係長
　　小野（教育政策係）
　　原田（教育政策係）

6　議題及び議事の大要

　　別紙

7　閉会　　14 時 55 分

令和３年１１月３０日
開議　　１３時３０分

１．開会

〇教育政策係長　井上尚史君

それでは、皆さんお揃いになりましたので、ただいまから総合教育会議を開催いたします。

本日は、お忙しい中、御出席をいただきまして、ありがとうございます。

それでは、お手元に配付しております令和３年度第１回総合教育会議協議事項に沿って進めさせていただきます。

まず、総合教育会議の設置者であります田中市長より、御挨拶をいただきたいと思います。

田中市長、よろしくお願いいたします。

〇市長　田中純君

もう挨拶は省略しますので、続けてください。

〇教育政策係長　井上尚史君

それでは、協議事項に早速入りたいと思います。

田中市長、議事の進行をお願いいたします。

２．協議事項

行橋市教育振興基本計画について

（１）計画の概要

〇市長　田中純君

今日は議題がかなり網羅的に入っていますので、集中的に委員の皆様には議論していただきたい点を３点ほど前もって用意をしていますので、この表でいくと、この真ん中の学校教育の部分を中心に議論をしていただきたいと思っていますので、それ以外の点については、今日は、議論は省略させていただいて、後でお読みになっていただければ、あるいは後で御質問していただければと思っていますので、学校教育の充実を除いて、事務局のほうからざっと説明してください。

〇教育総務課長　吉本康一君

それでは、私のほうから計画の概要について、まず説明をさせていただきます。

それでは、お配りしております計画の素案を御覧いただきたいと思います。

まず、本市は平成２８年度に第１期の計画を策定いたしまして、これまで様々な教育施策に取組んできたところでございます。今年度、第１期の計画期間であります５年の

最終年度ということで、第２期の計画を策定しているところです。

まず、目次を除いた２ページをお願いいたします。計画の位置づけについてでございます。本計画は、教育基本法の第１７条の２項に定めます教育振興基本計画というものに位置付けまして、本市の実情に応じた教育の振興のための施策に関する基本的な計画でございます。かつ本市の最上位計画でございます、いま策定中の第６次の総合計画、こちらを土台といたしまして、教育分野全般に関する教育行政の中心的計画ということになっております。

続きまして、計画の期間になります。こちらも第１期と同様に５年間といたしまして、第２期では令和４年度から８年度の５年間となっております。

４ページをお願いします。計画の策定体制についてでございます。策定体制につきましては、行橋市教育振興基本計画策定委員会条例、これに基づきまして、学識経験者、市内小中学校の代表校長、各種団体の代表等、計９名の委員で構成いたします策定委員会を設置いたしまして、これまで４回の会議を開催して、計画素案について議論を行ってきたところでございます。委員の名簿につきましては、この素案の５５ページのほうに載せておりますので、御確認をよろしくお願いいたします。

続きまして、７ページから１９ページにかけましては、第１期計画で掲げました各施策について、担当課のほうがこれまでの取組み内容を振り返りまして、自己評価を行った結果を掲載しております。この振り返りによって、それぞれが課題を認識いたしまして、後ほど議論、御説明をさせていただきます第２期での施策の展開の方向性を決めていく参考とさせていただいております。

続いて、２１ページをお願いいたします。第２期の基本理念を書いております。第１期計画で設定いたしました基本理念「学びあい　支えあい　つなぎ合い　未来を拓く力をはぐくむ　人づくり」というものでございました。この理念は、今後も必要となります本市の教育の方向性を言い表しているものと考えられることから、第２期につきましても、これまでの基本理念を継承していこうと考えております。

続きまして、２２、２３ページですけれども、これまで教育委員会では、学校教育分野での人づくりの目標像といたしまして、目指す子ども像を定めて、長年用いてきておりますが、社会教育分野におきましては、目標像としての市民像というものを設定しておりませんでした。今回、第２期計画の策定にあたりまして、自立、協働、郷土という視点で子ども像の見直しと市民像の新たな設定を行おうとしております。

策定委員会におきまして議論したものといたしまして、２２ページの下に示しております、子ども像としては、「グローバルな視点をもち、夢に向かってチャレンジする子ども」、「思いやりの心をもち、多様な価値観を認めあう子ども」、「「郷土ゆくはし」の良さを知り、誇れる子ども」としております。

２３ページに目指す市民像といたしまして、「いつまでも元気で生き生きと活気あふれる人」、「多様性を尊重し、あらゆる世代を通じてともに学び支えあう人」、「地域の自然・歴史・文化に誇りを持ち、「郷土ゆくはし」を愛する人」としております。

次に２９、３０ページにつきましては、同時にお配りしておりますＡ３横、先ほど市長のほうがお示しをしました計画の体系図を併せて御覧ください。

計画の体系図では、目標と基本項目、施策の数及び内容について、第１期計画から若干見直しを行っておりまして、４つの目標と６つの基本項目、そして１７の施策としております。

そして右側の取組群につきましては、各課が担当いたします各事業を施策ごとにまとめておりまして、その中で特に重点的な取組みについては、３１ページ以降の第４章、今後５年間の取組み、施策の展開という中で取組み内容や目標指標を明記いたしまして、計画の実施期間であります５年後、令和８年度を目標年度とした数値目標を設定いたしまして、計画の進捗管理を行ってまいります。なお、重点取組には二重丸を付けて表記をしておりまして、左の１７の施策ごとに少なくとも１つ以上の取組みを重点取組として選定をしております。

３１ページ以降が、この後、議論をしていただきます内容となっておりますので、ここまでが計画の概要とさせていただきます。以上でございます。

（２）今後５年間の取組み（施策の展開）

②学校教育の充実

〇市長　田中純君

ありがとうございます。時間がそんなにないので大変恐縮ですけども、今から議論していただく点は、このピンクの真ん中、学校教育の充実という項目の中で、３点ほど議論のテーマの軸となるワードを用意させていただいていますので、そこに絞って議論をしていただきたいと考えています。

その３点は、学力とＩＣＴとＡＬＴという、その３点は相互に当然のことながら絡み合っているわけで、１点だけを取り出して議論をするということではなくて、この３点の内２つ、あるいは１つ、あるいは３点全部でも構いませんけれども、絡み合っていると考えられますので、その３点を中心に議論を進めていきたいと思います。

まず学力ですが、県全体の、全国平均の中に占める県平均はかなり上がっているよね。

〇指導室次長　森本典行君

そうですね、福岡県の平均値は、令和元年が全国で２０位だったんですけれども、現在は７位まで、福岡県全体が上がりました。ですので、福岡県との差が詰まらないのは、私たちも上がっていて、同時に上がってきたということが言えると思います。

○市長　田中純君
　それは、そう理解していいの。
○指導室次長　森本典行君
　はい。
○市長　田中純君
　私の記憶だと、１０年前は、福岡県は全国平均で４０位くらいだったんですね。お尻から数えて何番目だった。７位まで上がっているの。
○指導室次長　森本典行君
　はい、県は７位まで上がっています。
○市長　田中純君
　じゃあ、それにくっ付いて一緒に上がったということは、総体的には行橋市も上がっているというぐあいに考えて差し支えないわけですね。
○指導室次長　森本典行君
　はい。
○市長　田中純君
　それについてＩＣＴがそれに対してどの程度の効力を持ったかということを事務局のほうから御説明をしてください。
○教育総務課長　吉本康一君
　ＩＣＴにつきましては、御存知のとおり平成２７年度から本市におきましてはＩＣＴ教育を重点的な施策ということで位置づけまして、順次、まずはハード面のほうから整備をどんどん進めていって、小学校・中学校、北小、長峡等ですねモデル的な学校ということで位置付けて今やってきています。
　昨年度、国のほうもＧＩＧＡスクール構想の加速化ということで、このコロナ禍が加速化につながったわけですけども、そういう背景があって端末等の整備は１人１台完了し、あと校内のネットワーク通信環境も高速化に対応できるネットワーク環境を実現したところであります。
　ただ、先ほどの学力のほうが上がってきているという客観的な数字等があります。これというのは、地道にそのＩＣＴ、ハードのほうに行政のほうで投資をしつつ、教員の方もかなりハードな労働環境に置かれながらも、やはり行橋市の教育現場としてＩＣＴを活用するんだというところでしっかりやってきていただきました。
　なかなかやはり１人１台でなかった環境でタブレットを共有しないといけないという環境の中では、先生の間では、使える先生、使えない先生等の格差というのは、正直発生はしているところであります。なので、その状況の中で端末のほうがポンと後から１人１台の環境になって、どうしてもこれまでなかなか使える環境になかった先生方から

すれば、それをどう使いこなそうかというところで非常に困惑されている先生もいらっしゃるのも事実でございます。ただ、これはもう全国的に結局与えられた環境というのは、今やっと他の自治体も足並みが揃ってしまったので、本市におきましても少しハード整備は先んじてやりましたけれども、ハードの環境のほうはもう全国一律になったところですので、やはり今後はそこの活用面というところでしっかり教育現場のほうで使っていただいて、子どもたちは逆にそれに十分に対応できる能力もあると思っていますので、しっかりそれを活用していこうというふうには考えています。以上です。

○市長　田中純君

ありがとうございます。

続いて、後１点、ＡＬＴについて概略の説明を事務局からお願いします。

○教育総務課長　吉本康一君

ＡＬＴにつきましても、ＩＣＴと同様に英語教育も今の田中市政になってから、しっかり力を入れようというところで、ＡＬＴも市長が就任された後に増員して、現在市内に９名います。中学校の担当が３名と小学校の担当が６名ということで、計９名おりまして、一昨年まで教育委員会のほうに席を置きつつ、学校のほうに派遣をするかたちをとっておりました。そこを少し昨年度から変更して、学校のほうに今はもう専属で行っていただいて、そこからシフトを組んで全校に派遣をするというかたちを取らせていただいております。

それで、やはり英語につきましては、昨年度から始まった新学習指導要領においても、３、４年生においては外国語活動という位置づけで年間３５時間、５、６年生については、今度は英語科ということで教科になった。それで年間７０時間の単元をしないといけないという状況になっております。その中で行橋市としては、ＡＬＴが９名いるけれども、この近隣においてもかなり恵まれた環境に置かれております。なので、そのＡＬＴの先生方と担任の先生がしっかりとティームティーチングというかたちを取って、授業を行っていただいております。

ただ、１つ懸念されることは、やっぱり特に小学校の先生は、英語の授業をしないといけないというところで、なかなかスキルの面が追い付いていかないということもあったりして、本来であれば主導権は、本当は担任の先生が持たないといけないけれども、ＡＬＴの先生に少し英語の授業を任せているような先生も、中には見受けられるというところで、我々教育委員会としては、最初なかなか導入部分としては難しいと思いますけれども、ＡＬＴにも同時に言っているのは、あなたたちはあくまでも助手的な立場で参加を、先生方をサポートしてくださいと、しっかりそこは先生を支える立場でチームになってやっていただきたい、ということを常々申し上げております。なので、そこは少し先生方もしっかり自覚を持っていただいて、なかなか難しいかもしれませんけれど

も、担任の先生としても授業をしっかりやっていけるようにお願いをしていきたいと思っています。以上です。

○市長　田中純君

　ありがとうございます。まず、最初に事務方の説明があったようなことを背景にして議論をしていただきたいんですけれども、ハードの準備は非常に早かったけれども、それにソフト面が追い付いていないという話が、まさに事務局のほうからあったわけですけれども、それについてのまず感想からお伺いしたいんですが、水谷さん、どう思われますか。

○委員　水谷知子君

　学校訪問とか、授業とか研究発表などに参加させていただく中では、どの先生方もやはり慣れないＩＣＴも使いこなしていらっしゃって、様々な努力をされているんだろうなというのは感じています。また子どもたちも授業に楽しく参加しているなというのは、いつも感じております。

○市長　田中純君

　かなり積極的な評価ですね。

○委員　水谷知子君

　そうですね。ただ、本当に苦手な先生も中にはいらっしゃるのかもしれないんですけれど、やはり努力はされているのじゃないかなというのが、私の感想です。

○市長　田中純君

　桃坂さんは、現場に行かれましたか。

○委員　桃坂克己君

　はい、何校か見させてもらったんですけど、確かに多少のバラつきがあるなというのは感じました。子どもさんたちも非常に低学年の子どもがタブレットにすごく興味を持ってやられているのかなと感じます。

　企業としても、パソコンが一気に導入された時期があるんですが、やはりそこでも差が出てきた。どうしたらいいんだろうということで、やっぱり楽しくやれるじゃないですけれど、好きなこととか楽しくやれることを見つけていってやって、やっぱり触っていくというのが重要なのかなと思って、そういった取組みを企業の中でもやっていきました。

　先生方も、たぶん凝ってやる先生もいると思うんですよ。そういったのを指標にしながらうまく水準を上げていく、そういったことが必要になってくるのかなと、少し感じました。

○市長　田中純君

　とはいえ、当然と言えばそれまでですけれど、やはりバラつきがかなりあるというこ

とは御実感されているわけですね。
○委員　桃坂克己君
　はい。
○市長　田中純君
　村上さんは、この件に関してどういった御意見ですか。
○委員　村上信哉君
　バラつきに関してですね、それはもう断然子どものほうが早いわけですよね、覚えるスピードがですね。むしろ先生のほうがついていけていないというのが実際のところ多いんじゃないかと思います。
　それもだけど今回コロナのことで急速に先生も必要に迫られてしないといけなくなりましたので、そういった意味では、先生同士のティームティーチングじゃないですけど、先生同士で教え合うこともとても大切なのかなとは思います。若い先生が年配の先生に教えるような。
○市長　田中純君
　若い先生方の勉強会はやっているの。
○教育総務課長　吉本康一君
　そうですね、いま市長が言われたような、昨年度立ち上げました特に若手というか情報担当の先生方に、月に１回のペースで集まっていただいて、いろいろ今後ＩＣＴを進めるためにどうするべきだという議論をして、先生たちに持ち帰ってもらって、自分の学校で、それをどう展開するかというところなんですけども、課題は学校によっては、持ち帰ったとしても、それを今度なかなか展開できる学校とできない学校があるというのが中にあるというのを、ちょっと聞いておりますので、そこをうまく改善するためにも我々としてもちょっと考えていかないといけないねというのは、いま話し合っているところです。
○市長　田中純君
　バラつきはあるんだけれど、コロナのお蔭でと言ったら変な言い方ですけど、コロナのせいで少し教師のほうもやる気が出てきたというか、やらざるを得ないという状況になったかなというふうな雰囲気は、金澤先生も感じられますか。
○教育長職務代理者　金澤精子君
　はい、そうですね。タブレットにしても、どうしても使わなければならないというのじゃなくて、使ったら便利、使ったら助かる、そういうのを実感したときに本当のものになると思うんですよね。使え、使えとかだけでは、やはり本物にならない。
　そして先ほど水谷委員がおっしゃっていた学校訪問等を通して感じたことは、やはり学校間、教師間の話題になっているバラつき、これは間違いなくあります。でもこれは

今までそれに接してきた期間とか、そういうのでもう仕方のないことだから、じゃあこのバラつき感を、どうＩＣＴ推進委員を中心にした組織づくり、その組織を委員会がどう指導していって、そこを動かしていかないと、もう先生たちができないからだめ、では進まないですね。

それと学力の話は、また後で出ますね。ＩＣＴに関しては、そう思いました。

○市長　田中純君

教育長、そこら辺はどうですか。今後の見通しも含めて、このコロナを経て。

○教育長　長尾明美君

そうですね、いまＩＣＴのほうから説明があったんですけど、実はＲ２年ですね、同じ時期なんですけれども、授業支援システム・ロイロノートというので実績を見ているんですが、Ｒ２年については、小学校は月に使っていた頻度が１３．３パーセント、中学校においては７．５パーセントくらいだったんです。それが同時期で今年度を見てみると、小学校が６０パーセント、中学校は８０パーセントということで、かなりロイロノートの使用実績が上がりました。やっぱりこれはコロナももちろんあるんですけれども、やはりいま金澤委員がおっしゃったように、これ使って便利だねというのもそうですし、やはりこの支援ソフトシステムを使うことによって、子どもたちがどういうことを考えているのかなというのが見えてきたというところがありますので、そういった意味では、バラつきも少し是正されてきているかなというふうには、今捉えております。

ただ、やはり得意な先生がいらっしゃる学校は、もちろんどんどん新しいことをしますし、やっと体制が整ってきたところは、これからというところがありますので、やはり良いものをどんどん共有して、それを発展させていくような、そういった仕組みをしながらバラつきの是正を図っていきたいと思っています。

○市長　田中純君

持ち帰りを始めたの。

○教育総務課長　吉本康一君

そうですね、持ち帰りについても、これは年度当初、市長から御教示をいただいたところでありますし、我々も教育委員会として、せっかく１人１台あるんだから、その環境を学校だけじゃなくて家庭にもということで発信をさせていただいて、ただ、最初は学校については、やはり持ち帰ることの心配事のほうが大きくて、すごく実際に消極的でした。ただ、これも第４波、第５波を経て、持ち帰ってできる可能性というのを実感することで、学校も、これを持ち帰ることで可能性がこんなに広がるんだねということを認識したようでありまして、いま持ち帰りについては、１、２年生の低学年については、なかなか難しくありますけど、３年生以上については毎日の学校もありますし、週末に必ず持って帰るという、その時に必ずこういった課題をして来てください、という

ことで今やっているところです。

中学校については、ほとんどの学校が持ち帰りをしている状況でございます。

○市長　田中純君

前回の総合教育会議の時でしたか、私がいずれカバンの中はｉＰａｄだけになりますと言ったら、金澤先生から怒られた記憶がありますが、それはどうですか。やはり我々世代はもちろんそうなんだけど、何となく本を読むにはやはり紙の匂いが、みたいなそういう文化で育ったから、郷愁はあると思うんだけど、そこら辺は依然としてそういうお考えですか。

○教育長職務代理者　金澤精子君

すみません、ちょっと他のことを、前回を思い出しながら、なぜ私はそう言ったのかと、それを考えていました。すみません、もう一度お願いします。

○市長　田中純君

前回ですね、子どもたちが重いランドセルを背負って、肉体上、健康上もよくないという意見もあったりするくらい、多量の荷物を行き帰り持っているという中で、もしｉＰａｄを教師も子どもも十全に使えるようになったら、カバンの中はｉＰａｄ１枚になりますよ、という私が発言をしたら、金澤先生が、いやいや紙の匂いは絶対に必要ですよ、という反論をされたと思うんですけど、この点に関しては、今もお考えは一緒ですか。

○教育長職務代理者　金澤精子君

はい。媒体はタブレットだけじゃないし、紙媒体も大事だと思っているし、普通、授業の中でタブレット授業だけを見ても、子どもが本当に身に付いているのかなと、私はノート文学というのを大事にしているから、そうしたらタブレットにも書けますよとか、あの時に意見が出たけど、やはり紙に、ペーパーに書き込んだ、それを自分のものとして収めていくという、そういうもう本当に並行したものじゃないとだめだと、今も思っています。

○市長　田中純君

村上さん、その点はどうですか。

○委員　村上信哉君

やっぱり極端なのは良くないと思います。あまりにも偏り過ぎると。例えば別の側面で、たぶんタブレットを使い続けることによって目が悪くなるとか、他の弊害とかも出てくると思いますので、あまり偏ったかたちに、私たちの委員会が持っていかないほうがいいような気がしています。

○市長　田中純君

両方いいとこ取りで、いいところだけ取っていけばというような、簡単に言えば、そ

ういう感じですか。
○委員　村上信哉君
　変な話ですけども、物を持って書くという、やっぱりそれができなくなる可能性があります、タブレットだけでは。今の子どもは実際にマッチを擦ることもできないんですよ。擦らなくてもいいんですけど。だからそういうふうに昔の方ができていたことが今の子どもができない、しかし現に今そういう物がこの世にあるということもありますので、やはり書道というのも、私は大事なような気がしますし、あらゆる経験をしていくことによって成長というのができていくと思います。
○市長　田中純君
　桃坂さん、その点についてはどうですか。
○委員　桃坂克己君
　そうですね、現時点では、村上さんが言われたように、偏るというのは非常に難しいのかなと。これが１０年後、２０年後になってくると、また変わってくるのかもしれません。現時点だと得意・不得意というのがタブレットにもあるし、ノートの教育にもあると思います。市長が言われたようにいいとこ取りじゃないですけれど、得意分野をどんどんタブレットは生かす、ノートは伸ばしていくとか、そういったことで、じゃあ次の段階として、このノートを使うのをタブレットに移行するのには、どうしたらいいんだろうと。そうした問題点を潰していくことによって、段々タブレットもしくは違う媒体になっていくのかなという感じは持ちます。
　会社でもやっぱり紙をどさっと使う人もいますけど、どんどん無くす方向でやっていこうというのは検討します。この仕事はタブレットでやれるじゃないか、ただし、こういったものは顔を突き合わせてやらなければいけない仕事で、これはちょっと残していこうねというのが実際にあるので、そこは精査していかなければならないのかなというふうに感じます。
○市長　田中純君
　マッチを擦れないというのは、いい比喩だと思うんですね。確かにそうなんでしょうけど、じゃあ反対サイド側の人の意見から見たら、どんな時に必要なのかと、キャンプの時に必要だと。キャンプの時だけマッチを擦る練習をするのかという、そういう根本の質問になりませんか。
　つまり何が言いたいか、私はそっちにくみしているわけじゃないですよ。意見として、消えいくものは消えていくと。新しいものがその代わりに入ってくるじゃないかという考え方も確実にあると思いますが、その点はどうですか。
○委員　村上信哉君
　そうですね、私は先ほども言いましたけど、極端な方向にいってしまうと、例えばう

ちはたまたまお寺ですので、過去の物がたくさん残っているわけですけども、データというかたちでは、媒体がないと出て来ないわけですね。だけれども紙に書いた、特に墨で書いたものは、水害とかに遭わない限りは永遠と残っていくというものがありますので、あくまでも私は、タブレットは道具、文具みたいな物です。文具として便利に使っていく、便利に学んでいくということは大事だとは思いますけども、それをオンリーにしてしまうということは、とても危険なような気がします。

○市長　田中純君

その点で、どうですか、水谷さん。

○委員　水谷知子君

そうですね、本当に難しいと思うんですけど、例えばうちはもう子どもが高校を卒業しているんですが、高校時代は、最初に辞書を全部揃えました。ただ、やはり便利なので、途中から誰も辞書を持って行く子どもがいなくなって、皆、電子辞書を使っていました。ただ、紙で引けないというのはよくないのかなと思って、自分たちで引くこともできて､それで便利な電子辞書を使うのがいいのかなというふうに思っていましたので、またタブレットについても同じことが言えるかなと思っています。

○市長　田中純君

結論とすれば、上手に使えという感覚ですね。

（「そうですね」の声あり）

その点、今ソフトは、何を入れているんですか。

○教育総務課長　吉本康一君

ソフトウェアですか。ベースは先ほど教育長が言われたようにロイロノートという・・

○市長　田中純君

それだけですか。

○教育総務課長　吉本康一君

それプラスは、ｉＰａｄのベースとなるアプリはほとんど入っていますけど、あと学校ごとに学習に使うようなアプリは、うちの学校はこういうアプリを入れたい、という申請に基づいてダウンロードをしていただいているというようなかたちです。

ただ、他の自治体が入れているようなデジタルドリルとかいうのは、まだ行橋市は導入できていないので、それはまた将来的に導入に向けて検討していこうとはしております。

○指導室次長　森本典行君

この３年間、私も現場によく足を運んで見ていましたが、数学の授業が最もタブレットの授業は使いやすいかなと。それともう１つは電子黒板にグラフを書くスピードが格段に上がったんです。電子黒板は自動的に直線を引いてくれますので、昔のように先生

が定規を当てて、１回板書を書く時間というのが極端に減りました。即ち子どもたちも前で発表するときに、自分たちで電子ペンを使って電子黒板上に説明したりすることが簡単にできます。そうすると発問の回数や発言の回数、問題を解く量が増えているというのは間違いなくございますし、もう１つは、現在、数学の問題は国語的な力が非常に必要になってきまして、言葉で説明しないと数字だけではだめだと、高校入試もそうなってきておりますので、そのような力もタブレット越しに説明をしたり、そういう場面もよく増えてきたのかなというのは感じています。

○市長　田中純君

いやいや、そういうお話を伺うと隔世の感がありますね。私は、ハードをかなりのスピードで入れたけれど、一向に進まないなというのがイライラしていたんだけど、教育長、そこら辺は、ここ１、２年であったの。

○教育長　長尾明美君

はい、やっぱりＲ２年ですね、私が着任したときは、やはりハードが先行していて、ソフト面にはかなり課題が多いなと思ったんですが、先ほど申し上げた通り、昨年の今ぐらいから急激にスピードが上がっています。

○市長　田中純君

やっぱりコロナですか。

○教育長　長尾明美君

はい、今年度は特に中学校のほうがいろんなことにチャレンジするということを積極的にやっていただいているので、それを小学校が見て、あっ、これだったら私たちもできるかもということで、そういった相乗効果も出ているというのもありますので、以前のすごく遅れているという感覚は、今は正直なくなってきています。

○市長　田中純君

どうぞ。

○教育長職務代理者　金澤精子君

指名されていないんですけれど、前に現場にいたころは、中学校というのは、研究発表校にもならなかったし、発表会をしないんですよね。授業研というのは数少なかったし、もうずっと前ですよ。最近、中学校は、発表会に行ったときも教科が全部違うでしょ。小学校は、いろんな教科をしなければならない、教師が算数を１本絞ってとかでやっていたけど、中学校は、今度はそれぞれの教科、二人体制の所もいれば三人体制もいる。そういう人たちが何か一つ目的を、子どもたちにどういう学ばせ方をするというのをテーマにとって、そして団結しているというのを、本当に最近は感じたんですよね。そこはすごく大きい力ですね。学力のところで言いたかったんですが、それが、今さっき教育長さんがおっしゃった、ＩＣＴを使うにしても、そこのところが結構力強いもの

があっているんだと思います。頑張っているんですよ。
○市長　田中純君
　確かに電子黒板は、効率化を非常に上げるよね、無駄な時間が相当少なくなるよね。そういうぐあいに使い方に気付いて、先生方が自分の技量の初期投資をきちんとやってくれれば、結果的には自分らが楽になるんだよね。
　じゃあ重ねて事務局に伺いますけども、今はいい例でＩＣＴが学力にプラスをもたらした例だけれども、今後、学力とＩＣＴということで考えると、どういうところが難点、あるいはどういうところが難しいと考えられますか。
○教育総務課長　吉本康一君
　ＩＣＴの活用についてですか。
○市長　田中純君
　はい。
○教育総務課長　吉本康一君
　活用については、自分も今年から担当させていただいて、課題というかなかなか難しいなと思ったのは、やはり校長会とかを通じていろいろメッセージを学校現場に送っているし、教育委員会としてはこうしてほしいとかを言っていたとしても、やっぱり同時に教員の働き方改革とよく言われていますけど、そこをちゃんと同時並行でやっていかないと、先生方は二言目にはやはり忙しい、大変だ、という言葉が返って来るんですね。なので、教育委員会としてＩＣＴ、ＩＣＴ、やってくれ、やってくれ、やりましょうよ、と言ったとしても、先生たちはやはり生身の子どもたちの相手を日々しているわけで、この子どもたちの対応に追われてＩＣＴの勉強だったりＩＣＴ用の教材をまず作る。必ず教材作りはＩＣＴを使ったほうが簡単だと思うんですけど、慣れていない先生からすれば、まずＩＣＴで使う教材作りが難しくて、それなら昔ながらに模造紙に書いたほうが私はいいわ、という先生もいらっしゃるわけですよね。そこに意識をどう変えていくかというのが非常に難しい面を持っておりまして、さっき言ったように働き方をどう改革していくか、そこでも少し量が減るから、自分たちの今後のためにもＩＣＴを使ったほうがどんどん楽になるんですよ、というのを理解していただくという努力を、教育委員会はしなければいけないのかなと思っています。
○市長　田中純君
　そこら辺は、結局、先生方の個性に依存するという答えになりがちなんだけど、そういうことですか。
○教育総務課長　吉本康一君
　そうですね、そこにどれだけ理解を示していただけるか、後は学校現場に行ったときに、学校も組織なので、組織として教育委員会があり、学校長があり、教頭、主幹教諭

という組織で動いている中で、そこがちゃんと指揮命令でできる部分と、どうしても先生の個、教師、教師としての考えで、学校現場というか、先生個人の授業づくりというのがどうしても尊重される風土だと聞いているんですね。そこはやはりどうしても上からＩＣＴをやれと言ったとしても、いや、私はこのやり方でやりたいというのを頑として変えていただけない先生も依然としていらっしゃるというところもあります。

○市長　田中純君

そういった点、どうですかね。私が実は何回か話したことがあると思うんですけども、全国のＩＣＴ教育首長会というのがある。もう６、７年前に始まって、つくば市が最も先進的な地域で、つくば市が、学校の子どもたちが首長会に入っている首長たちの前で様々な実験をやってみせたということがあるんですね。その後、首長会に入っている教育長も来られていて、私が一番気になったことを、つくばの教育長さんに、教師にどうしたらこれを理解してもらえるんですかね、やっぱり研修ですかね、と言ったら、つくばの当時の教育長さんは、一切やめてください、とにかくこれはもうある種の全く別の世界の出来事だから、本で教える、紙で教えるという方々に、そういうタブレットなんかで教えるというようなことは難しいです。だからそこのエネルギーはもう捨ててこっちに集中してください、それが一番いいですよ、こうおっしゃったんですよ。ある意味、正解だなと思うんですよ。

行橋市の場合は、どうなのかなと思いますが、教育長、そこら辺はどうやられているんですか。

○教育長　長尾明美君

そうですね、でも皆さんの話に出るように、やはり得意な先生と不得意な先生に分かれています。それで、やはり初めはベテランの先生もですね、もうＩＣＴよりも紙で書いたほうがいいだろうと進めていましたけど、最近少しずつ、学校のほうできちんと方針を出して、これはＩＣＴを使ってやりましょうというようなベクトルを合わせようということで、学校長が取りまとめをしてくれるようになってきています。

ですから、そういった意味では、教育の関係者の人からも、ベテランの先生がＩＣＴを使うと、授業も得意だし、ＩＣＴを使って、より良いものがどんどんできて、ベテランの先生にチャレンジしてもらったほうが効果的だというような話もいただいているんですね。ですから、そういった意味では、いま校長方針のもとで、若い先生とベテランの先生がタッグを組んでやっている学校もありますし、やっぱりベテランの先生が自ら、ここはやったほうがいいなと言ってくれている学校もありますし、さっき言ったみたいに、もう私はいいわという学校もありますし、そこは正直バラバラですけど、方針を校長がきちんと出しているというのが、大きく変わってきた点だと思っています。

○市長　田中純君

それは、でも１年前と比べたら様変わりで、１年前だったと思いますけど、同じ協議会でこれをテーマにしたときと、雰囲気が１年間で、やはりコロナのせいなんですかね、随分変わりましたね。

○教育長　長尾明美君

そうですね。ただ、やはり私たちが学校訪問に行くときには、どうしてもＩＣＴをメインにやるという授業は、まだまだ見せるのには自信がないというか、自信があるものを見せたいと思っていらっしゃるので、そこは皆がＩＣＴをやっているかというところまでには行きついていないんですけれど、指標から見ると毎日使っているというところは確認できているので、１、２年前とは全く状況は変わってきているという実感は、私たちは持っています。

○市長　田中純君

それと、これもマイナスの面だけども、家に持ち帰って自分で検索して、あるいはいろんな所に飛んで、どんどん自分で勝手に伸びていくという生徒が現われてほしいなという思いを私は個人的にはすごく持っているんだけども、反面、子どもが行ってはならない場所もあるので、それのフィルタリングはどうしているの。

○教育総務課長　吉本康一君

今、市長がおっしゃったような、これはたぶん先生方もそうでしょうし、保護者の方もそこをすごく心配されると思うんですね。情報モラルというふうによく言われていますけども、そこの教育は必ずしたとしてもですね、やはり子どもたちって横のつながりがあったりして、ここをこう行くとこんな所が見られるよ、みたいな話が、横で話がいったりして、実際に先生方が、こんなサイトを見ていました、というのも中にはあって、だから少し規制を掛けたほうがいいんじゃないかという声も、学校のほうからもあります。

我々も端末を与える側としては、ここで何でも見せて、そこはもう教育のほうでカバーするという考え方も一つあると思いますけども、教育委員会としては教育委員会が与えているタブレットなので、ある程度そういったセキュリティの担保をしなければいけないと思っています。なので、いま予算を取らせていただいて、そういったフィルター機能とかを今後しっかり、持ち帰っても、学校でも家でもちゃんとフィルターが利くような端末として与えたいというふうには考えております。

○市長　田中純君

それはアンブレラか何かですか。

○教育総務課長　吉本康一君

ｉ-フィルターというのを、この前お話した通り、他の学校にもちゃんとフィルターを利かせていきたい。

今も実は持ち帰りをしております。その中でも、ただ、今ｉＰａｄで言うＳａｆａｒｉというのを使えないようにしております。その理由は、先ほど言ったように心配なお声があったので、どこでも自由に見られるような環境は、ちょっとまずいんじゃないかということで、一旦消しておりますけども、ロイロノートという授業支援ソフト上で検索ができるので、そこは少し規制をかけることができますので、今はそれを通じた検索を許可している状態なので、今後はそこをクラウド型のフィルターソフトを入れることで、そういったＳａｆａｒｉを使えるようにして、見ちゃいけない所には行かないけれども、ある程度サイトには行けるような環境整備をしていきたいと思っています。

○市長　田中純君

検索ができなきゃ、何のために持っているのか分からない。だからそれはぜひ安全弁だけは付けてもらって、自由に検索できるように、ぜひやってください。そこは心からお願いします。

時間があまりないので、先ほどの学力の点にＩＣＴを必ずしもじゃなくて、学力そのものの評価に入りたいんですけど、これは一般的に言われていることだけれども、日本人の子どもたちの学力は圧倒的に下がっている。ＯＥＣＤの調査と比べると日本全体の教育の学力が非常に落ちているという報告があるんだけれども、その点、やはり学力を上げるということは、別に、勉強しろ、勉強しろということではなくて、今後どう日本国が生き残っていくかという点からいっても極めて重要だというぐあいに思っているんですけれども、学力が落ちたという感触はありますか。

水谷委員、日本人じゃなく行橋でもいいんだけど、学力が落ちたと感じるような経験はありますか。

○委員　水谷知子君

そうですね、実際に自分自身がそこまで感じることはなかったんですが、周りの方のお声とかですね、当時、御自身が例えば京都高校に行かれていた、そのときよりも東大の合格率は下がっているとかですね、そういう周りの方の声はよく聞きます。

ただ、自分自身がそこまで、やはり学校などに行かせていただく中では、子どもたちも比較的、意欲的に取組んでいるような気がして、すみません、実感的にはないです。

○市長　田中純君

そうですか。桃坂委員は、どうですか。

○委員　桃坂克己君

恐らく一般論としては、そうなってきているんだろうと思います。私は採用のほうもいま携わっているんですけど、大学生、高校生、うちの会社を受ける時、履歴書、成績というのを見て試験を受けさせるんですけど、多少偏ってきているのかなという感じを受けます。得意分野は非常に得意になってきている子どもが多いんですけれども、一般

常識的なところが苦手だなという子が多くなってきているのかなという。点数自体はそこまで変化はないんですけど、それぞれの科目に対して、そういったところが見受けられるのかなと。いま好きなところはやるけれど、というところが多いのかなというのは感じています。

○市長　田中純君

見たいニュースしか見ないということですね。

○委員　桃坂克己君

そんな感じですね。

○市長　田中純君

村上委員、その辺はどうですか。

○委員　村上信哉君

逆にちょっとお尋ねしたいのですが、日本全体の学力が落ちているという、いま話がありましたが、それを、なぜそうなのかというような日本の分析はされているのでしょうか。あまり聞いたことはないんですけども。

○市長　田中純君

ＯＥＣＤの調査で、確かＰＩＳＡというのがありますけど、要因分析は、そういうところでグラフの所が１番からざっと、それだけで日本がかつて小中高の数学なんかは、ほとんどトップだった。それが今やもう見る影がないという事実はあります。これは確実にあります。お帰りになって、それこそ検索してみてください。

要因については、私なりの判断でしかないんですけども、やはり経済力ですよ。日本全体の経済力が落ちていますから、だからどうしても教育に回るお金が少なくなってくる、資源も少なくなってくる、そういう循環だろうなと勝手に思っています。いわゆるバブルがはじけて以降、一人当たりの国民の所得が伸びていないのは日本だけですから、しかも最低レベル。中国なんかは、ある人に言わせると、１９９０年から一人当たりの所得が４００倍から５００倍になっている。日本はバブル崩壊の時とほぼ一緒だと言われている。つまり個人の所得が減ったというのが最大の大きな要因じゃないかなと思っています。

○委員　村上信哉君

それでは教育を頑張っても、解決方法は個人の所得を上げないとだめということですね。

○市長　田中純君

本当にそうです。現実の問題としてはそうだと思います。だから私がここでＩＣＴに、あるいは学校の物理的な環境に投資をするのは、家庭の、親父の財布の中身で子どもの教育が決まっちゃいかんという思いがあるんです。それが伝わっているのかどうかは別

にして、私たちの世代、昭和二桁の初めのころは、八百屋の子どもが東大に行っていたんですよ。今は東大に入っている子の親の年収は１千万円以下が一人もいないと言われている。だから社会構造が二極分解している。だから生活保護が３代にのぼっても生活保護。上のほうは、もう資産は何人かで何パーセントを取ってしまう、そういう世界に今の日本はなっている。それを唯一打破できるのが教育のはずなんです。

だからせめて行橋だけでも教育の優遇で、お金のあるなしで決められないようにしてほしいという、それは私の個人的な願いですけど、確かＰＩＳＡと言ったと思いますので、お帰りになったら調べてみてください。

時間がもうあまりないので、今ので何かありますでしょうか。

よろしいですか。

（「はい」の声あり）

では、少しＡＬＴの話をしたいと思います。

その前に、英語教育は、今どういう位置づけになっているのか、事務局のほうから。

○教育総務課長　吉本康一君

先ほど言ったように学習要領にしっかり載って来ていますので、小学校でもしっかり教員が指導しなければいけないという位置づけになっております。そこはなかなか話を聞くと苦慮している先生もいらっしゃると聞いています。それを助けるのがＡＬＴの外国語指導助手という人材なのかなということで思っております。

今、先ほど９名と言いましたけれども、７名がネイティブの外国人の方で・・

○市長　田中純君

いえいえ、ちょっと待って。学校教育のカリキュラムに英語は教科として入っているの。

○教育総務課長　吉本康一君

はい。それは入っています。

○市長　田中純君

それは小・中、入っているの。何年からですか。

○教育総務課長　吉本康一君

中学校からはもともと英語はありますけど、小学校は昨年度から教科化になっています。

○市長　田中純君

１年生からですか。

○教育総務課長　吉本康一君

５、６年生は教科になって、３、４年生は教科というか外国語活動という位置づけです。

○市長　田中純君
　では、５、６年生は必ず、ですか。
○教育総務課長　吉本康一君
　はい、５、６年生は必ず英語の教科を使ってしないといけないようになっています。
○市長　田中純君
　そうすると全く英語のできない先生が担任だと、もうそこで子どもにすごいハンデがつかないの。
○教育総務課長　吉本康一君
　そこは、小学校においては、たぶん皆同列だと思うので、小学校の先生たちが一生懸命学びながら一緒になってやっているという状態だと思います。
○市長　田中純君
　そこら辺、ＡＬＴの役割というのは、実は、私は全く個人的には極めて重要だと思っていて、特に昭和世代は、ディス・イズ・ア・ペンで育ちましたから、全く英語が分からないという世代ですから、今やもう世界の公用語になっているので、英語教育は、ぜひ力を入れてやっていきたいと思っているんですけど、そこでＡＬＴの活用方法についてお願いしたんですけど、今は７名ですか。
○教育総務課長　吉本康一君
　９名です。
○市長　田中純君
　９名で何校ですか。
○教育総務課長　吉本康一君
　９名で、中学校で３名、小学校で６名を配置しておりまして、小学校で言えば６名で１１校を見ているような状態です。
○市長　田中純君
　１人２校くらいですね。その辺、水谷さん、どう思われますか。
○委員　水谷知子君
　そうですね、できればやはりＡＬＴの先生が多ければ多いほどやはりありがたいとは思います。でも、今のところ、やはり市のほうで一生懸命努力していただいて、人数も確保していただいていると思います。
　私が授業などを拝見させていただいて思うのは、やはり子どもたちの積極的な参加率が高いのかなと思います。ＡＬＴの先生が入っていらっしゃる授業というのは、比較的子どもたち皆一生懸命参加しているというか、何かボーとしていたりする子どもがいない感じです。それは、私が個人的に感じることなんですが。
○市長　田中純君

関心が高いということですね。
○委員　水谷知子君
そうですね、とても関心が高いと思います。ただ、先生方も子どもたちに教えるということで努力をしていただいているとは思います。
○市長　田中純君
桃坂さんは、ＡＬＴの入った教室は、御覧になりましたか。
○委員　桃坂克己君
いえ、私は、まだ見れていないんですが、非常に重要だと思っています。私自身、アメリカに３年半ほど行かせてもらったんですが、私も昭和世代ですので、ディス・イズ・ア・ペンから入っていったということで、やはり苦労しました。やっぱりそういったネイティブの方と話をしていくと、どんどん話していこうという気にもなってくる。たぶん子どもさんは、そういった気持ちがどんどん出てくるんじゃないかなと。
やはり授業というかしこまった昔の英語の授業だと、なかなか入り込めない人も多かったと思うんですけれど、日常の生活、例えば文化を学んでいくとか、そういったのと併せ持ったかたちでＡＬＴの先生と一緒にやっていくというのが、やはり効果的じゃないかなと思います。
本当に、できれば常時いてもらうというのが理想だとは思いますけど、ただ、そうやっているので、今度は教師の方もどんどんスキルアップをしていくという、その方たちを使ってやっていくという方法もあるんじゃないかなとは思っています。
○市長　田中純君
ありがとうございます。村上さん、いかがですか。
○委員　村上信哉君
とてもこれは重要だと思います。特に子どもたちの試験、いま見ていたらヒアリングがすごく増えている、パーセンテージが増えているんですね。まず小学校の時から、英語が楽しいなというか、本当の発音を聞けるというメリットはすごくあると思いますので、楽しいな、から始まって中学になって段々レベルが上がってきますから、その段階で昔みたいにただ単に文法を覚えて、筆記中心の試験じゃなくて、今・・
○市長　田中純君
何か、グラマーは無くなったんでしょ、教科から。確かそう言っていました。
○教育長職務代理者　金澤精子君
もう無いですよね。
○委員　村上信哉君
だから今どっちかというと聞いて答えるというような、他の試験もそのような感じですので、すごく重要だし、もっともっとたぶんこれから力を入れなければいけない分野

にはなっていくと思います。
○市長　田中純君
　後は、財布次第ということですね。
○委員　村上信哉君
　そうですね。
○市長　田中純君
　金澤先生は、いかがですか。
○教育長職務代理者　金澤精子君
　とても重要な教科だと思います。ＡＬＴは、学校が泉小とか行小とか、クラスが多いとなると、この人数ではちょっと厳しいところが、一生懸命やりくりをしてくれているでしょうけれど、まだ増やしてほしいところがありますね。
　それから小学校の教師は、今まで英語を教えるということがなかったから、恥ずかしいんです。もう気恥ずかしい。喋れないことはないんです。簡単なところは喋れるんです。中学校の英語の授業をこの前、見せてもらったんですけど、ああいう授業の中に、ちょっと恥ずかしいと思う教師でも入って聞いていると、何か授業が終わった後、話したくなる。単語を３つ４つ続けて言いたくなるみたいな。だからそういう研修もやはり要りますね。恥ずかしさを除けたら今ＡＬＴに担任が学んでいるところなんです。だからそのＡＬＴをもうちょっと増やしてもらって学べたら、きっとスタートできると思います。
○市長　田中純君
　ネイティブと日本人の比率はどれくらいですか。
○教育総務課長　吉本康一君
　２人が日本人ＡＬＴなので、それ以外はネイティブの方となっています。
○市長　田中純君
　それはどうですか。少しやっぱり私なんかからすれば、ネイティブを増やしたほうがいいんじゃないかと思いますが、教育長、どうですか。
○教育長　長尾明美君
　さっき３年生から外国語活動に入ったと申し上げたんですが、やっぱり多い学校はＡＬＴが１人だとちょっと厳しいかなと、ただ少ない学校は、授業時数の関係で、ちょっとＡＬＴが十分力を発揮できないかなと、バラつきがあるようなので、ちょっとそこを見て、必要な所に必要な原資を入れるというのが必要なのかなと思っています。
○市長　田中純君
　それは、どこで決めているの。この人をあそこにやる、あの人をあそこにやると。
○教育総務課長　吉本康一君

それは学校と相談して、教育委員会のほうで、この先生はここの拠点校に席を置いて、そこからシフトを組むというのは、そこは学校と話して決めて年間計画を立てて、学級の授業に行っていただくというかたちを取っています。

○市長　田中純君

男女比は。

○教育総務課長　吉本康一君

４人が男性なので、それ以外は女性です。

○市長　田中純君

大体、平均して何年くらい滞在してくれているの。

○教育総務課長　吉本康一君

統括をしている一番リーダー的な存在の人が１０年以上は、たぶん行橋でＡＬＴとして活躍していただいているので。

○市長　田中純君

彼が人材確保のキーマンということ。

○教育長　長尾明美君

そうですね。

○教育総務課長　吉本康一君

確かに増やしていくというのも一つあるんですけど、人材が要るかどうかなんですね。ただ、結局学校の授業に入るので、人材の見極め、英語が喋れるだけだったら、たぶん引っ張って来ることは可能かと思いますけれども、児童・生徒の前に立つというところがありますので、そこをちゃんと人材というのを適正に判断しないといけないというのは、少し課題にはなっています。

○委員　村上信哉君

海外に行けない人がそういう経験を積ませていただいて、すごくありがたいことですね。

○教育長　長尾明美君

休み時間にコミュニケーションを取るのがすごくいいと、保護者の方からも言われました。

○教育総務課長　吉本康一君

この計画も策定委員会、先ほども言いましたけれども、４回ほど議論する中で、策定委員会の中にもＰＴＡの方がいらっしゃる、母親代表の方がいらっしゃったりして、その方からもＡＬＴの方が授業に入ったり、先ほど教育長が言ったように授業以外のところで子どもたちと一緒に給食を食べたり、昼休みに遊んだり、そういったところで交流をするのがすごくいい、我が子の姿を見ると喜んでいる、という声もあります。

参考までにＡＬＴを行橋としては、今でも人数は他の自治体に比べると多いほうでありまして、それが結局小学校の段階から関わって中学校になって、中学になると受験というのがあって、英語の学力というのがネックになってくると思うんですけれど、中学３年生に対して県が英語テストをしてくれる、ＩＢＡテストというんですけれど、それの判定が返って来ると、このお子さんは英検の３級くらいの学力がありますよ、というような評価が返って来るんですけれど、それは令和２年度の結果を見ると、行橋は京築の中でナンバー１です。

○市長　田中純君

あれは、英語の学テはどうなの。

○指導室次長　森本典行君

英語の学力テストは３年に一度実施されています。

○市長　田中純君

毎年はやっていないんだね。

○指導室次長　森本典行君

はい。

○市長　田中純君

村上さんは、ＡＬＴの入っている教室に行かれたことがありますか。

○委員　村上信哉君

行っていないです。

○市長　田中純君

金澤先生は。

○教育長職務代理者　金澤精子君

はい、行きました。

○市長　田中純君

やっぱり水谷さんが言われるように、子どもたちが楽しそうにしているとかいうのは感じますか。

○教育長職務代理者　金澤精子君

いいですね。

○教育長　長尾明美君

英語の歌から始まるんですね。それを皆で歌ってスタートするという、オープニングからストーリーができていて、起立、礼という感じじゃないです。

○教育長職務代理者　金澤精子君

私たちの自分の英語というのは、もう本当に頭の中にスペルが来ないと、その言葉が理解できないという世界だけど、子どもはそうじゃないんですね。訳が分からなくても

すっと入ってきているうちに、もう体で覚えているんですね。
○教育長　長尾明美君
　もう本当に踊りながらいろんな言葉が出てくるという、そういう授業が多いですね。
○市長　田中純君
　それは結構やね。
○教育長　長尾明美君
　はい、もう本当に楽しいですよね。
○市長　田中純君
　ＩＣＴ問題そうだけど、やはり初めの初期投資が一番重要なので、そこをうまくやると、さっと入って行けるので、まさにアメリカ御滞在経験の桃坂さんは、向こうは日本人学校がありましたか。
○委員　桃坂克己君
　はい、ありました。やはり赴任している御家族がいるんですけど、親より子どものほうが英語を覚えるのは早いですし、私もそうでしたけど、耳が馴染んでくるんですね、ああいう環境の中にいると。そうするとつたない単語の能力でも、それでも答えられるようになってくる。それをどんどん繰り返していくと、今度は喋れるようになっていく。
　やはり環境、これはＡＬＴの先生方とのコミュニケーションになるんでしょうけれど、そういった中で耳が英語の耳になっていくというのは、非常に重要なんじゃないかなと思います。
○市長　田中純君
　まさにそれが成果で学力というところに跳ね返ってくるのは、村上さんがさっきおっしゃったように、やはり耳から入る、ヒアリングから入る、そういう点でおっしゃったんですよね。
（村上委員、頷く）
　どうぞ。
○教育長職務代理者　金澤精子君
　学力のところで言いそびれたんですが、こういう全国の学力調査のポイント指数で見ていくのは、絶対に数字がないと比べられないから仕方ないんだけれど、本当に学力って何なんだろう、というのをもう１回考え直さないと、指導要領のほうには、深い学びであって多様的な学びであってという、あれを教職員がどれだけ理解できているか。本当に文字だけじゃない、あれをしっかり。となると教職員の質にもなるんですけど、あれを理解して、それをやはり授業の中に持っていったら、そんなにすぐにはポイントは上がらないけれど、それが行橋市の教育に根付いていったら、本当に長い間に本当の学力になっていくんじゃないかなと、いつも思うんですが、じゃあそれをどうするかとい

ったときに、ちょっと具体案だけど、やっぱり・・
○市長　田中純君
　それは永遠のテーマでして、私はこっちばかり言うから、こっちを専門に考えていてこっちをやりたいんだという、というぐあいに思われると思うんですけど、実は私はこっち側なんです。それで育ちましたから。ただ、こっちは成果が出ない、それから数量化ができない。我々の時代は教師の背中を見て育て、学べと、そう言われたものです。その意味は、ある程度の年齢になって、ある程度の経験を積むと、その持つ意味が分かるんだけれど、当時は分からないですよね。どうしても、じゃあ何で比べるかと言ったら、やはり１００メートルを１０秒で走る人と１２秒で走る人、そういう話になっちゃうんですよ。
　でもこれは永遠のテーマですけど、それを今の学校に、こっち側を全部無視してくれなんてことは毛頭ないんですけれど、取りあえず行政が教育に関われるのは、財布だけなんですよ。教える内容までは行政は関われませんので、教育委員会も十分理解していると思いますけれど、要は財布なんですよ。だからこの財布でどうサポートしていくかということで、どこに重点的にサポートが要るのかということを皆さんの御意見を伺いながら決めていくということです。
　だから教育の中身については、金澤さんのおっしゃることは、私は１００パーセントよく分かるし、私もどっちかと言えばそっち派です。ということで、ＩＣＴとＡＬＴを学力に結び付けるというのは、逆に言えば金澤さんがおっしゃる、すぐ効果の出ない教育、それが本来の教育かもしれません。だけどこっちはすぐに結論が、ある種、事務方の話を伺っていると、ここ１、２年で顕著に出ているという気がしますので、そこら辺の評価は、水谷さんは、いかがですか。
○委員　水谷知子君
　そうですね、私もやはり子どもを持つ親の立場として、にはなってくるんですが、やはりＩＣＴとかの効果はかなりあるんじゃないかなと思っています。まず子どもが興味を持って授業に参加できるので、そこの部分で効果があると思うのと、後はＡＬＴの先生に関してなんですが、私は以前、グレースチャーチスクールの生徒さんを受け入れしたときに、１０日間の間ではあったんですが、１日中その生徒さんが英語を話している。それを聞いているだけで、本当に子どもが英語に興味を持って、そこの部分においては、本当に効果があると思います。
　ただ、その後ですね英語の職業に就くとか、そういうことには至らなかったんですが、ただ、効果は本当にかなりあったと思います。
○市長　田中純君
　そうですか。桃坂さんは、御滞在の経験もあるということですが、お子さんもいらし

たんですか。
○委員　桃坂克己君
　私は単身赴任でしたので、ちょっと残念だったのは、ちょうど中学、高校生だったもので、受験も控えていたのでというところで、嫁のほうが出しきらなかったので。たまには遊びに来い、１週間でも居れば全然違うぞ、と言ったんですが、なかなかそういう機会もできなくて、そこはちょっと心残りだったなと思います。
　ちょっと私も学力のところで､いろいろ統計を出していただいて比較というところで、やっぱり今まで数値化できなかった、市長言われていましたが、そういったところで比較もだいぶできるようになってきたのかなと。これを今度いろいろ対策でやっていくのには、その平均値だけではなくて、これもバラつきがあるんですね。中央値なのかもしれないけれども、例えば上と下ばっかりいるということも考えられるし、中央値に近い人がいる、それによって、今度やることが変わってくるんだと思うんですよね。こういった人はどんどん上げていってやらないといけない教育になってくると思うので、そこら辺の分析も、私も一緒にやっていけたらなと思っています。
○市長　田中純君
　恐らくたぶんそれをブレイクスルーできるのがｉＰａｄの検索だと私は思うんですよね。だから持ち帰ること、ネットにつなぐことが多少変な所に行かないような安全保障だけはやっておいて進めて、伸びるときはガンと伸びてくれればいいなという思いはあります。
　その辺、村上さんは、どう思われますか。
○委員　村上信哉君
　私もちょっと桃坂さんがおっしゃったのと同じようなことで、ＩＣＴがどんどん進化していると思うんですよね。だから今よりもさらに使いやすくとか学びやすくなっていくのは間違いない。ソフトが開発されていけば、また良くなっていくと思いますし、同時に勉強だけじゃなくて、うちの子も一人暮らしするときにテレビは要らないと。もうタブレットだけでいいと。そういうレベルなんですよ、もう。全て入試にしても何にしても全部タブレットを使わないとできないようなシステムになっていますので、勉強だけではなくて、それに慣れていくという意味でも、とても重要なことだし、今度はさっき言われたバラつきという面でも、ＡＩみたいなのが進化していって、この子は、今こういうレベルしかないので、これをこう持っていけるような指導方法がタブレット自体でできるようになるとすごいなと思います。きっとなるだろうなと思います。
　だからその初期投資として市がバックアップをしてくれることは、すごく大事なことだと思います。
○市長　田中純君

そのいま村上委員がおっしゃっていただいたことは、大体私が思っていることとほぼイコールなんですけども、別に対立軸を言っていただきたいわけじゃないですけど、金澤さん、どう思われますか。

○教育長職務代理者　金澤精子君

いいですね、そんなのができると。学力の、分からない子どもにそれを使ったら分かるといったらありがたいですね。いろいろと投資のほうをよろしくお願いします。

○市長　田中純君

確かに水谷さんもおっしゃっていましたけど、やっぱり圧倒的に子どもが関心を持つ、楽しいんですよ、早い話が。だからそういう意味では、勉強しろ、勉強しろというかたちじゃなくて、子どもが自主的にやるというところが非常に実は大きな点だと思います。それと村上委員が言われるように、社会に出て行く時にもう必須の状況ですよね。その技能だけはちゃんと身に付けて行橋から出してあげたい。そういうふうに思います。

では、この方針は、もう今後もできる限り行政のできる範囲内でやっていこうと思いますので、その辺は御了承いただけたということで。

（「よろしくお願いします」の声あり）

最後になりますけど、教育長、ちょっとまとめの発言を。

○教育長　長尾明美君

今日はどうもありがとうございました。私も着任いたしまして、いま皆さんと協議させていただいたＩＣＴ、英語というのは行橋の文化になるものだと思っていますし、いま市長からもありましたけど、先を見通して平成２９年から子どもたちのために御支援いただいたというところもありますので、この二本柱はきちんと行橋が先進校となるように進めていきたいと思っていますし、それをすることによって学力も併せて上がっていくんだろうと思います。

今、５年間の振り返りもさせていただいたんですけれども、若干ＩＣＴの遅れからスタートをしましたけど、結果としては、５年間の評価としましては、目標は達成したかなと思っています。

やっぱりこれから５年間、いま村上委員からありましたけれど、すごいスピードで進化する中で、やはり教育委員会としてもきちんとついていって、スピードを上げて、どういったものにチャレンジしていくかというところが課題になってくるのではないかと思っています。

先ほど中学校の話をしましたけれども、確実に中学校が先行して新しいものにチャレンジする精神はすごく養ってきたと思っています。１つの例を挙げると、職場体験も今はコロナでできないものですから、オンラインで職場体験をして、コロナでなければ、この近隣の企業としか職場体験の経験ができなかったものを、オンラインであれば、例

えば野村ホールディングスと意見交換ができるとかですね、今は都心の企業との意見交換もできる、そういった意味でも、また夢が広がる、そういったところもあるので、ぜひＩＣＴをうまく活用しながら子どもたちが夢に向かってチャレンジする育成ができればというふうに思っていますので、ぜひ皆さん、また御協力をいただきたいと思っています。

今日はどうもありがとうございました。市長、ありがとうございました。

〇市長　田中純君

では本当に、最後に、今日のまとめとして、事務局に記録しておいてほしいのは、やはり学力とＩＣＴないしＡＬＴは、かなりの確率を持って継続性、あるいは相関性があるんだと。今のベクトルは間違っていないので、これをさらに推し進めるというのが教育長を含めて教育委員の皆さんの総意だというぐあいに記録をしておいてください。

行政のほうは、先ほども言いましたけど、財政面でどこまでサポートできるかということに尽きますので、それは、行政は行政なりに頑張ってまいりますので、ぜひよろしくお願いします。

委員の皆さん、今日は大変ありがとうございました。

（「ありがとうございました」の声あり）

〇教育政策係長　井上尚史君

市長、ありがとうございました。本日協議いただきました内容を踏まえまして、計画素案の調整を行いたいと思います。

本日の協議事項につきましては以上でございますが、その他、何かございましたら。

（「ありません」の声あり）

３．閉会

〇教育政策係長　井上尚史君

では、以上で令和３年度第１回総合教育会議を終了いたします。

本日は、お忙しい中、長時間にわたりましてありがとうございました。

（「ありがとうございました」の声あり）

閉会　１４時５５分